

榛名山東麓の災害と歴史 遺跡からわかる災害と土地利用の変遷

History and Natural Disaster in the Eastern Foothills of Mt. Haruna:
Natural Disaster and Changes in Land Use as Seen from Sites

大塚昌彦

①群馬県の災害と歴史

②榛名山東麓の火山災害

③浅間山噴火、天明3年の災害

④榛名山噴火、6世紀中頃の災害

⑤榛名山噴火、5世紀末の災害

⑥浅間山噴火、4世紀初頭の災害

⑦平安時代初頭の大地震災害

おわりに

【論文要旨】

榛名山の東麓周辺は、紀元後における災害の歴史が、文献と遺跡発掘調査から何回もあったことが裏付けられている地域である。ここでいう災害とは、火山災害と地震災害の2種類である。

火山災害は、古墳時代以後に榛名山の噴火が2度あり、浅間山の噴火が3度、合計5回の火山災害が認められる。代表的なものとして、古墳時代中期に榛名山の最初の噴火で、マグマ水蒸気爆発後火碎流爆発があり、中筋遺跡のムラが火碎流の熱で建物群が焼失状況で発見された。同後期に榛名山の2度目の噴火で厚さ2mにも及ぶ軽石が、黒井峯遺跡のムラを埋没させた。

天明の大飢饉の引き金になった浅間山の天明3年(1783)の噴火では、直接的な降灰ではなく間接的な土石流災害として吾妻川・利根川流域に莫大な被害を及ぼし、中村という村の一部が埋没していたり、甲波宿禰神社という神社が埋没している。

地震災害については『類聚国史』に記載されている弘仁9年(818)の大地震と認定できる巨大地震跡が半田中原・南原遺跡でみつかっている。

このように、一つの地域が幾度も違う形で大きな自然災害に見舞われており、その地域の荒廃した状況から再開発・復興に至る状況が発掘調査で確認でき、土地利用の変遷が理解できる。

さらに火山灰の堆積で災害以前の生活面(地面)が残されており、その詳細な発掘データは今までの考古学の常識をも覆す大発見が多くある。なかでも中筋遺跡・黒井峯遺跡の発見は、集落遺跡の根幹に係わる集落形態の指標、住居の夏・冬住み替えの生活スタイルの提示ができた。

火山災害地の遺跡発掘調査は、多くの情報量が内蔵されているため考古学研究の古代社会復元には最高の遺跡調査研究エリアと言える。